

きぼう利用プラットフォーム中間評価

「健康長寿研究支援プラットフォーム」
評価結果

2026年3月

きぼう利用推進有識者委員会

はじめに

国際宇宙ステーション(ISS: International Space Station、以下、「ISS」という)は、日本、米国、欧州、カナダ及びロシアの国際協力のもとに建設された有人宇宙施設である。我が国はISSの構成要素の一つである、「きぼう」日本実験棟(以下、「きぼう」という)の開発及び運用・利用を中心としてISS計画に参加している。

国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構(以下、「JAXA」という)は、きぼう利用を戦略的に推進するため、「きぼう利用戦略」を策定し、そのなかで特に利用の重点領域を「きぼう利用プラットフォーム(以下、PF)」として定義して、成果創出及び利用拡大を図ってきた。きぼう利用戦略第4版(2024年3月制定)において、きぼう利用PFにおいて実施する各利用テーマについては、個別評価プロセスを設定し運用しているが、並行して利用PFの中間事業評価等を検討し、ポストISSに向けたこれらPFの重点化などを進めるとした。

そこで、2030年のISS運用終了までの利用及びその先の利用を見据え、今後の利用戦略の議論に資するため、JAXA有人宇宙技術部門の外部諮問委員会であるきぼう利用推進有識者委員会及び選考評価委員会にて2025年度に「きぼう利用PF中間評価」を実施し、きぼう利用推進有識者委員会にて評価結果を取りまとめた。

本文書では、「健康長寿研究支援PF」の評価結果をまとめる。

1. きぼう利用PF中間評価について

1-1. 評価目的及び方針

- (1) きぼう利用PFのこれまでの成果を中間的に取りまとめ公開することで、きぼう利用の意義・価値を広く訴求するとともに、今後の地球低軌道利用の需要拡大に資する。
- (2) これまでの成果とその意義、社会貢献や学術進展等への波及効果等に対する評価実施及び評価結果の取りまとめを通じて、各利用PFのキー技術、国際競争力を持った実験装置・実験技術等を明らかにし、利用PF運営の改善やポストISSへの移行計画検討に資することを目的とする。
- (3) 各利用PFは設置場所、定常運用後の年数やミッション実施数、民間事業者移管ステータス等が異なるが、きぼう利用戦略(第4版)のなかで利用PFとして定義しているものについて、上記の目的のもと評価を実施する。

1-2. 評価対象利用PF

きぼう利用戦略(第4版 2024年3月制定)のなかで利用PFとして定義している以下のPFを対象として実施する。

<プラットフォーム一覧 (きぼう利用戦略(第4版)掲載)>

- | | | |
|------|-------------|-----------------------------|
| i. | 新薬設計支援PF | タンパク質の構造に基づく薬剤設計支援 |
| ii. | 健康長寿研究支援PF | 「きぼう」を使ったヒトの健康長寿に関連する研究への貢献 |
| iii. | 革新的材料研究支援PF | 無容器処理技術を利用した材料研究への貢献 |
| iv. | 超小型衛星放出PF | 超小型衛星放出サービスの提供 |
| v. | 船外ポート利用PF | 船外ポートを利用した戦略的利用推進 |

1-3. 評価の視点と評価体制

各利用PFでの領域専門性やきぼう利用戦略等の議論の継続性を踏まえ、表1の(1)～(3)のように段階を3つに分けて評価する。評価フローは図1参照。

ただし、船外2つのPF「超小型衛星放出PF」及び「船外ポート利用PF」については、きぼう利用推進有識者委員会第21回会合(2025.3.19開催)での議論を踏まえ、民間事業者への事業移管の過程における事業者評価や宇宙理学委員会(JAXA宇宙科学研究所長の諮問委員会)での科学評価を含む後期運用延長審査会等で、これまでにJAXA内外で評価を実施済みのため、総括的な評価としてきぼう利用推進有識者委員会での全体評価のみを実施する。

表1. 評価の視点と体制

	評価の視点	評価体制
(1)	PF 運営・推進等にかかる評価(JAXA 内で実施) 利用 PF 運営の Lessons Learned やポスト ISS を含む今後を見据え利用サービス提供事業者主体での運用に向けた技術面または事業面の課題を識別し、その対策を議論する。 さらに商業/科学ユーザーの利用需要の取り込み可能性、利用 PF の高機能化等を確認する。	JAXA 有人部門において評価会を設定。 評価会メンバーは、宇宙環境利用推進センター長を評価委員長とし、当該センターの基幹職以上及び、評価委員長が指名する者で構成。ただし、利用 PF の担当基幹職は、各自が主として業務担当する PF 評価時は評価委員から外れる。
(2)	研究開発に関する評価 科学/技術専門的な観点から、個別ミッション単位ではなく利用 PF 単位で評価。国の科学技術施策の実現や民間企業の研究開発等に貢献する、国際競争力のある革新的な研究開発成果が獲得されたか等に関する視点とする。	各 PF が関係する以下の外部諮問委員会(選考評価委員会)でそれぞれ評価する。 本 PF を評価した委員会の名簿を別紙 1、他の委員会等への就任状況を別紙 3 に示す。 ➤ 新薬設計支援 PF: 高品質タンパク質結晶生成実験選考評価委員会 ➤ 健康長寿研究支援 PF: きぼう利用テーマ選考評価委員会(生命医科学) ➤ 革新的材料研究支援 PF: きぼう利用テーマ選考評価委員会(物質・物理科学)
(3)	全体評価 上記(1)、(2)を踏まえ、各 PF の中間成果及び今後の取組を総合的に判断する。また、地球低軌道利用の需要拡大に向けて、利用サービス提供事業者主体での運営に向けた取組の妥当性についても評価を行う。	きぼう利用推進有識者委員会 委員会の名簿を別紙 2、他の委員会等への就任状況を別紙 3 に示す。

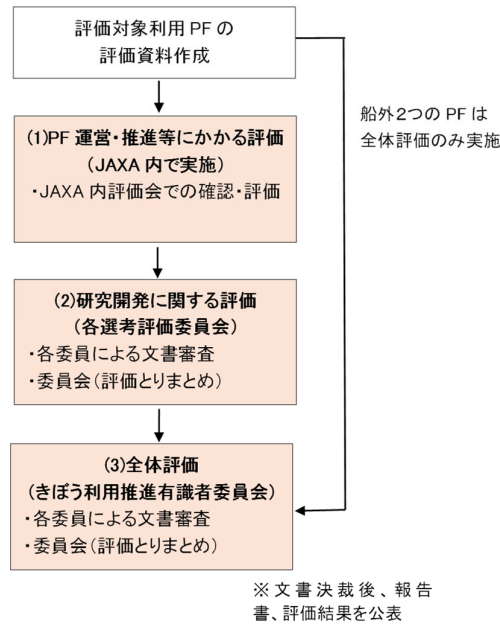


図 1.きぼう利用 PF 中間評価の流れ

1-4. 評価項目と評価指標

評価項目及び評価指標を表2に示す。評価項目は大きく1.～3.とし、それぞれ小項目を含む。各項目に対して、どの評価段階「(1)PF運営・推進等にかかる評価(JAXA内で実施)」、「(2)研究開発に関する評価(選考評価委員会による評価)」、「(3)全体評価(きぼう利用推進有識者委員会による評価)」で主に評価するかを表2の右側で識別する。

表2. 評価項目及び評価指標

評価項目		評価指標	評価段階		
			(1)JAXA 評価	(2)選考評価 委員会評価	(3)有識者委 員会 評価
1. PFの位置づけ・必要性					
①	利用PFの設置概念の達成、きぼう利用の目指す姿の実現、将来ビジョン	・設置概念の達成状況が妥当であるか。 ・きぼう利用の目指す姿の実現へのPF貢献があったか、又は見込めるか。 ・これまでの取組をベースにした将来ビジョンが妥当であるか。	○	—	○
2. PF運営・推進					
①	利用拡大に向けた取組状況とその発展について	戦略パートナーとの連携、新規ユーザの獲得、有償利用の拡大、政府ミッション、国際協力への貢献など、幅広い利用を実現したか。また、今後の需要拡大策が検討されているか。	○	—	○
②	新たな概念・価値を創出する実験サービス(枠組み、装置等)の提供状況とその発展について	新たな概念・価値を創出するために、PFにおいて、実験フロー、装置、治具開発を含め実験サービスを立ち上げ、継続的に運用しているか。またその発展について検討されているか。			
③	PF運営上の課題識別とその対応について	技術面または事業面の課題識別は具体的に示されているか。またその実効的な対応策が示され、妥当であるか。PDCAの事例を提示し、継続しているか。			
④	ノウハウの蓄積と継承(サービス提供を含む)	これまでのPF運営に関するノウハウの蓄積がなされており、その有効活用がなされているか。			
3. 研究開発成果					
①	PF目標の科学技術的意義及び達成度	PF目標の科学技術的意義は高いか、達成度のレベル。	—	○	○
②	科学技術的価値を創出する取組	・取組は適切であったか。 ・PFへの波及効果があったか、又は見込めるか。			
③	研究開発成果を創出する実施体制	実施体制は適切であったか、また今後の成果創出が期待される体制か。			
④	科学/技術的成果	得られた成果は、国際的なレベルに照らして高いか、設定された目標を超える成果があったか、また今後の成果創出は期待されるか。			
⑤	研究開発成果の活用、波及効果	・関連科学分野・技術領域への波及効果があったか、また期待されるか。 ・科学的、技術的に活用が見込めるか、成果活用の意義・重要性は高いか。			
⑥	今後の利用需要(科学/民間)に繋がる基礎データの蓄積、発展性	基礎データは蓄積されたか、活用する仕組みは構築されたか。今後のPF利用の発展性、継続の意義はあるか。			
⑦	研究開発に関する総合評価・提言	・上記の研究開発に関する総合評価。 ・今後のPF利用に向けての課題、改善すべき点。			

2. 評価結果

2-1. PF運営・推進等にかかる評価

健康長寿研究支援PFに関して、評価会実施要領に基づき確認・評価を行った結果、PFの運営・推進が適切に実施され、利用が促進されていることを確認した。また今後のビジョンや取組について概ね妥当であると判断した。なお、主な確認事項・コメントは下記のとおり。

(1) PFの位置づけ・必要性

人類の活動範囲を広げる上で、極限の宇宙環境の生体影響を詳細に理解するためには、宇宙環境での動物を用いた研究は欠かすことができない。これまで日本になかった宇宙環境でマウスを飼育する能力(装置や技術)を獲得し、動物個体での研究機会を研究者へ継続的に提供した点は評価できる。NASAのRodent Researchプログラムが中止になり、今後、本PFを有する日本が宇宙マウス研究を牽引することが期待される。

(2) PF運営・推進

飼育装置というモノづくりと科学研究を適切にインテグレーションし、動物倫理を配慮したうえで、研究成果に繋げるPF運営形態を構築できていることを確認した。また、小動物利用研究の発展・拡大にあたり、外部有識者(研究者、民間企業)で構成されるアドバイザリ委員会を適切に運営し、新型飼育装置(SMART)の開発に着手するなど、ポストISSへのトランジションを事前に睨んだ活動を先行して行っているといえる。SMARTの開発・技術実証を計画通り進め、その開発完了審査において、ポストISSへつなげるための本PFとしての課題出しを完了すること。これらのほか、ノウハウの蓄積や民間事業者への作業移管等の取組も妥当といえる。

2-2. 研究開発に関する評価

① PF目標の科学技術的意義及び達成度

本PFは、「きぼう」を使った健康長寿に関連する研究への貢献を目指し、小動物飼育ミッションを中核として、生命医科学分野の研究支援に取り組むものである。宇宙環境でマウスの飼育や可変人工重力環境を実現するJAXA独自の装置等の技術開発や運用、PFの成熟度に合わせた実験系の高度化に加え、軌道上及び地上でのミッションに基づく学術的成果を多く創出し、その科学技術的意義及び達成度のレベルはいずれも極めて高いと評価する。特に、宇宙環境下でマウス後肢筋肉の萎縮と速筋化が起こる現象から、関連する転写因子を同定し、国内の企業と共同で筋力を維持回復する新薬の共同開発を開始するなど、宇宙ミッション成果から健康長寿に資する研究活動への道筋ができたと評価できる。

一方で、微小重力環境がヒトの老化と類似する生物学的変化をおこすという仮説に基づく研究基盤として、軌道上で生体にみられる現象が、その機序も含めて真に老化を反映しているのかという観点から、さらなる研究推進が今後求められる。

また、これまでに実施した9回の宇宙ミッションから得たデータの蓄積については、新しい知識体系の構築までには至っておらず、その分野における科学技術的意義を確定させていくことが必要である。

② 科学技術的価値を創出する取組

宇宙低軌道でのマウス飼育に成功していたNASAやロシアに対し、わが国では宇宙環境でマウスを飼育できる装置やミッション形態を独自に開発し、動物個体での研究環境を継続的に研究者へ提供し、日本の宇宙ライフサイエンス研究を新たなステージに導いた。特に、他国が有しない軌道上人工重力下飼育を達成するなど、宇宙空間における動物個体を用いた生命科学研究を先導する立場を確立しつつある。

宇宙ミッションで使用する装置の信頼性・安全性を担保するために、ミッション実施前に、実験試料回収やISS内での飼育環境などを想定して各々の要求条件を満たすための検討、検証を重ねた上で、打上げ・軌道上への適合性試験を実施し、装置の完成に至った点は極めて適切で、高く評価できるアプローチであった。

これらの取組により学術的成果が創出されていることからPFへの極めて大きな波及効果があったと言える。また、これまでに蓄積された技術やノウハウが、今後もPFのさらなる発展に波及効果を持つものと見込まれる。

なお、これらの検証基準等は制約が多い宇宙実験を踏まえ設定されたものが多く、科学的により高い成果を創出するためには、個体に与えるストレスを含め恒常性への影響などの基礎データを蓄積することを推奨する。

さらに、本PFでの研究の発展に欠かせない小動物飼育装置について、地上実験において小動物の行動学や生理学の観点から装置の妥当性検証や、今後の研究成果の創出のための装置改良などの課題も残されており、引き続き科学技術的価値を創出する取組が求められる。

また、NASAとの共同ミッション等を通して緊密な協力関係を維持しつつも、民間企業への技術移転を推進して、自立したPF運営とサービス提供を可能にするための準備を加速する必要があるだろう。

③ 研究開発成果を創出する実施体制

科学技術的な価値を創出するための開発支援体制、ミッション運用はともに過不足ない理想的な体制が構築され、成果創出に大きく貢献した。また、今後も大きな成果創出が期待される。

今後の課題としては、研究開発支援をより効果的にすることが挙げられる。具体的には、各種委員会、審査会等に当該分野の専門家を適切に参画させることや、研究開発の進捗や要求事項に対して十分なスピード感を持って対応できるようにすることなどにより、今後の成果創出及びその効率化に重要であることを引き続き留意して欲しい。

④ 科学/技術的成果

発表された学術論文の数と質の観点から、目標を高度に達成し世界をリードする成果を得たと高く評価できる。

JAXA小動物飼育装置の国際的な優位性は、これまでISSで小動物飼育ミッションを実施していたNASAがRodent Researchプログラムを中止した点を踏まえても、今後も引き続き発揮され、現在、軌道上実験準備中及び解析中のミッションからも優れた研究成果の創出が期待される。

一方で、宇宙実験を完了しているミッションで成果未公表のものについては早期の論文公表が求められる。

今後は、本PFがさらに発展し、新しい生命現象体系や研究分野を切り開くような成果創出を期待する。さらに、小動物飼育装置の動物行動生理学等の観点からの妥当性検証や、個別ミッションやサンプルシェアから得られた大規模データを統合し、機械学習等の手法を用いた研究基盤の構築と実施に取り組むことを検討されたい。

⑤ 研究開発成果の活用、波及効果

研究成果に基づき、企業と大学の協業による新薬の共同開発が開始されたことは、大きな研究成果の活用と波及効果として高く評価される。また、NASAとの国際連携による遺伝子発現変化等の実験生データの公開や、東北大学東北メディカル・メガバンク機構(ToMMo)と共同で構築したibSLS(宇宙生命科学統合バイオバンク、Integrated Biobank for Space Life Science)での公開、ならびにサンプルシェアの実施により多くの成果論文が発

表されたことは、意義の高い波及効果と言える。

現時点では成果活用まで至っているテーマは限定的であるが、本PFは「知の創造」としては極めて重要であり、ヒトの健康長寿に関わる「社会課題解決」までを考えると時間を要する解決困難な課題も含まれるので、長期的視点に立ち今後も継続的に取り組むことで成果を創出されたい。

今後は、大きな波及効果を導出するためにテーマ間の連携や成果の共有方法について予算措置も含めた検討や、明らかになりつつある宇宙環境での変化と加齢変化の相違について正確に発信していくことが必要である。

⑥ 今後の利用需要(科学/民間)に繋がる基礎データの蓄積、発展性

PFの推進により生体マウスに関する多くの基礎データがibSLSに蓄積され、ミッションデータの公開と二次利用促進の仕組みが概ね構築された。これは、宇宙環境利用の裾野拡大と今後の幅広い科学分野に活用される基盤となることが期待されるもので、その意義は大きい。

ibSLSのさらなるデータの充実化や、データベースとしての運用や普及等に課題はあるが、これらPFでの成果がポストISSへ適切に継承され、発展することが多いに期待できる。

⑦ 研究開発に関する総合評価・提言

本PFは、宇宙低軌道でのマウス飼育に成功していたNASAやロシアに対し、わが国では宇宙環境でマウスを飼育できる装置やミッション形態を独自に開発し、動物個体での研究環境を継続的に研究者へ提供し、日本の宇宙ライフサイエンス研究を新たなステージに導いた。

軌道上の小動物飼育装置や可変人工重力環境飼育システムを技術開発し、当該装置を利用した科学的意義の高い研究テーマを実施し多くの学術成果を創出した。また、NASAとの連携によりミッション成果を拡大し、さらにサンプルシェアにより波及効果を高め、獲得した基礎データを活用する仕組みの構築を行った。これらの成果を総合して、研究開発に関して期待以上の成果があったと評価する。

宇宙環境下でマウス筋肉の萎縮と速筋化が起こること、筋力維持のための新薬開発に道筋ができたことなど、科学的意義の高い研究成果が得られた。ただし、PFの個別ミッションのなかには、微小重力環境がヒトの老化と類似する生物学的変化をおこすとの仮説のもとに実施されてきものが含まれるが、これまでの研究成果を踏まえ、今後は軌道上で得られた知見と地上で見られる生命現象の関係についての理解をより深めてゆくことが重要であり、さらに新しい分野からの発展的な成果創出も期待される。

また、宇宙マウス研究におけるJAXAの優位性の維持及び、NASAのRodent Researchプログラムの中止と予算の大幅削減に対するJAXAリソースでの自立的な宇宙ミッションの実現のため、省力型小動物飼育装置(SMART)の新規開発や機械学習の手法を用いた研究基盤の構築等のPFの高度化・高機能化が求められる。

さらに、データシェアリングや商業利用に向けた障壁の洗い出しとその対応、PF運営の組織構造がニーズに応じた迅速性のある対応ができるかをより深く検討し機動性を高めることが、ポストISSに向けた取組として重要である。

今後も継続的な周知活動や、PF活動を通じて宇宙医学、宇宙生物学を目指す若手研究者の育成に期待する。

2-3. 全体評価

(1) PFの位置づけ・必要性

健康長寿社会実現に向けた国の課題解決にかかる研究(地上還元研究)を推進するとともに、有人活動領域拡大の科学基盤構築のための研究(有人探査研究)を推進するとい

う本PFの設置概念は、宇宙環境での活動拡大だけではなく、地上における老化などの研究へ繋がる社会的意義の高いものである。本PFにおいて、軌道上で小動物(マウス)を飼育し実験する日本独自のシステムを開発し、継続的に研究機会を提供できるようになったことで、多くの意義がある動物実験が行われ、科学的な成果が創出されたことは高く評価する。

また、宇宙環境が生体に及ぼす影響を調べることが可能な世界的にも数少ないPFであり、高齢社会日本から世界へ発信すべき長寿社会に必要とされる医療・創薬に高い波及効果が期待される研究活動はもちろん、将来の月面や火星重力下での健康影響を明らかにする活動は、将来ビジョンとして妥当である。

これまでスペースシャトルやISSで宇宙医学生物学研究に取り組んできたNASAが軌道上動物実験プログラムを中止するなか、今後、本PFによるきぼう利用がこの領域を牽引すると期待される。ポストISSでの研究ビジョンをより明確にするとともに本PFの実験サービスをどのように商業宇宙ステーションで実装するかについてさらなる検討を進める必要がある。

以上により、PFの位置づけ・必要性として、本PFは期待通りの成果があったと評価する。

(2) PF運営・推進

PF進度に合わせた段階的な取組整備や、JAXA内外の有識者、専門家のアイデアや意見を集約し反映する体制を構築して、優れた軌道上小動物飼育装置を開発し、宇宙環境においてマウスを健康に飼育して全数生還させた実績を高く評価する。特に、軌道上飼育装置等の実験システムの初期開発から軌道上実験の定常運用、さらにきぼう利用の拡大発展を見据えた小動物飼育装置自動化の開発は有意義である。また、研究代表者らが研究に使用しなかった未解析組織を、国内外の他研究者らに研究試料として活用したマウスサンプルシェアの推進構築は医療・創薬に高い波及効果が見込まれる。

事業面での課題は、費用面やリソース面で負担が大きいクルータイムがあり、自動化による新型飼育装置の開発を進める等、PDCAサイクルを確立し適切に回している。利用サービスの運営について将来的な民間事業者への移管を見据えた取組にも十分着手しており、PF運営のノウハウの蓄積と継承に向けた運用と推進は重要であり、期待に応える方策を実施している。創薬などのアウトカムアピールが容易なものに比べて、本PFの価値は継続的な基礎研究を積み上げていくことにある。効率化、自律化に対する対応を進める一方、民間事業者への移管に伴う運用資金の確保・拡大等についても積極的に取り組んでほしい。

一方で、貴重な組織サンプル等については、経年変化への対応および、今後の新しい知見や最先端機器による再測定・検証等を想定した組織保存バンクの構築が重要であり検討を要する。一定の維持費は必要となるが、将来に想定されるヒト組織保存バンク等との比較検討を見据えて、準備を検討されたい。

以上により、PF運営・推進は適切に行われ期待通りの成果があったと評価する。

(3) 研究開発成果

我が国独自の重力可変可能な軌道上小動物飼育装置の開発や、宇宙探査活動に向けた研究テーマの準備など宇宙進出に向けた日本のプレゼンスは高く、本PFの科学技術的意義は重要である。これまでに複数の軌道上マウスミッションを実施し、すでにハイインパクトジャーナルに論文を掲載し成果を上げている。さらに、サンプルシェアを通じた共同研究により、新たな成果も創出されている。構築したこれらの実験システムは将来の有人宇宙探査における人体への影響を解明する基礎研究を推進するために重要である。

宇宙環境下でのマウス筋肉の萎縮と速筋化等を対象とした研究から多くの科学的知見が得られた。加えて、筋肉と骨との関係、脳や他臓器との関係などの臓器連関を示すことが重要である。一方で、本PFの健康長寿研究としては、寿命に与える影響については現時点では明らかにされておらず、筋肉と骨との関係、代謝系などサンプルシェアした結果を含めて総合的に確認していくことが必要である。寿命遺伝子や免疫系、放射線影響などは分子レベルでの解明が可能であり、今後の研究の深化を期待する。本PFの発展においては、省力型小動物飼育装置の開発やAI活用等による効率運用と共に種差を意識した小動物(ラット、マーマセツ等)飼育の検討、「地上還元」のさらなる展開及び、「有人探査研究」についての具体的な道筋を示しつつ、比較的短期の目標を定めてアウトカムを具体化する取組を期待する。そのために、今後どのような課題を取り上げるべきかは、JAXAとしてテーマを設定し、共同で研究を実施する研究者を探索することが重要である。

今後の課題として、NASAの予算削減に伴うNASAアセット活用からの自律化が明示されており、早急な対応が望まれる。このPFを基盤にし、これまでの研究成果を具体事例をもってアピールするなど、最も高齢化が進む日本からこそ世界に提案できる価値提供を、今後加速していくことを大いに期待する。

以上により、研究開発について期待通りの成果があったと評価する。

全体評価における総評

健康長寿研究支援PFは、期待以上の成果があがっており、今後に向けた取組の継続が期待される。

以上

テーマ選考評価委員会(生命医科学) 委員名簿

委員長以下、50音順。本委員会では合議評価。

	氏名	所属
委員長	山口 朗 ※	東京歯科大学 口腔科学研究センター 客員教授
副委員長	武田 伸一 ※	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 産学連携顧問／名誉所長
委員	青井 貴之	神戸大学 大学院医学研究科 未来医学講座 幹細胞医学分野 教授
委員	上住 聡芳	九州大学 生体防御医学研究所 高深度オミクスサイエンスセンター 細胞不均一性学分野 教授
委員	牛田 多加志	東京大学 大学院工学系研究科 名誉教授
委員	緒方 徹	東京大学 大学院医学系研究科 外科学専攻 感覚・運動機能医学講座 リハビリテーション医学分野 教授
委員	田村 宏治	東北大学 大学院生命科学研究科 教授
委員	本間 研一	北海道大学 医学研究科 名誉教授
委員	松尾 光一	慶應義塾大学医学部 教授
委員	諸橋 憲一郎 ※	久留米大学 医学部 客員教授

2025 年 8 月現在

※別紙 3「きぼう利用プラットフォーム中間評価委員の他の委員会等への就任状況」参照。

きぼう利用推進有識者委員会 委員名簿

委員長、副委員長以下、50 音順。本委員会合議評価。

	氏名	所属
委員長	永井 良三	自治医科大学 学長
委員	山本 雅之 ※	東北大学東北メディカル・メガバンク機構 機構長
委員	浅島 誠	帝京大学先端総合研究機構 機構長 特任教授
委員	岡町 和晃	トヨタ自動車株式会社 事業業務部 チーフコンセプター
委員	佐宗 章弘	名古屋大学大学院工学研究科 教授 (副総長(産学官連携担当))
委員	津田 佳明	ANA ホールディングス株式会社 執行役員 未来創造室長
委員	西島 和三 ※	東北大学 未来科学技術共同研究センター シニアリサーチ・フェロー 横浜市立大学 医学部 客員教授
委員	丹羽 恵久	ボストンコンサルティンググループ マネージング・ディレクター & パートナー
委員	浜崎 敬	株式会社ワークスペース 参与
委員	御手洗 容子 ※	東京大学 大学院新領域創成科学研究科 教授

2025 年 11 月現在

※別紙 3「きぼう利用プラットフォーム中間評価委員の他の委員会等への就任状況」参照。

きぼう利用プラットフォーム中間評価委員の他の委員会等への就任状況

氏名	所属	委員会名	関係性	措置
山本 雅之	東北大学東北メディカル・メガバンク機構 機構長	きぼう利用推進有識者委員会	・JAXA 個別利用テーマの研究責任者 ・JAXA 宇宙医学研究ディレクタ(特別参与:宇宙医学研究の推進に関する事項) ・きぼう利用推進有識者委員会 副委員長 ・東北メディカル・メガバンク機構と JAXA は健康長寿社会実現への貢献を目指した「きぼう」利用に係る連携協定を締結している	健康長寿研究支援 PF に関する審議に加わらない。
西島 和三	東北大学 未来科学技術共同研究センター シニアリサーチ・フェロー 横浜市立大学 医学部 客員教授	きぼう利用推進有識者委員会	過去 3 年以内に JAXA きぼう小動物研究アドバイザリ委員会(現在は廃止)の委員に就任。	(委員会審議に影響を及ぼすものではない)
御手洗 容子	東京大学 大学院新領域創成科学研究科 教授	・きぼう利用推進有識者委員会 ・テーマ選考評価委員会(物質・物理科学)	文部科学省国際宇宙ステーション・国際宇宙探査小委員会委員、きぼう利用テーマ選考評価委員会(物質・物理科学)委員に就任。	(委員会審議に影響を及ぼすものではない)
山口 朗	東京歯科大学 口腔科学研究センター 客員教授	テーマ選考評価委員会(生命医学)	過去 3 年以内に JAXA きぼう小動物研究アドバイザリ委員会(現在は廃止)委員に就任。	(委員会審議に影響を及ぼすものではない)
武田 伸一	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 産学連携顧問／名誉所長	テーマ選考評価委員会(生命医学)	・過去 3 年以内に JAXA きぼう小動物研究アドバイザリ委員会(現在は廃止)委員に就任。 ・きぼう利用フラグシップミッション研究アドバイザに就任。	(委員会審議に影響を及ぼすものではない)
諸橋 憲一郎	久留米大学 医学部 客員教授	テーマ選考評価委員会(生命医学)	きぼう利用フラグシップミッション研究アドバイザに就任。	(委員会審議に影響を及ぼすものではない)

きぼう利用プラットフォーム中間評価に係る各委員会での審議等日程

日付	委員会等	内容
2024/10/30	きぼう利用推進有識者委員会 第 20 回会合	評価計画審議
2025/3/19	きぼう利用推進有識者委員会 第 21 回会合	同上
2025/7/24	PF 運営・推進等にかかる評価 会(JAXA 評価会)	PF 運営・推進等にかかる 評価
2025/8/8～9/5	きぼう利用テーマ選考評価委 員会(生命医科学)	研究開発に関する評価文 書審査
2025/10/20	きぼう利用テーマ選考評価委 員会(生命医科学) 2025 年度第 2 回会合	研究開発に関する評価取 りまとめ
2025/11/13～12/16	きぼう利用推進有識者委員会	全体評価文書審査
2026/3/27	きぼう利用推進有識者委員会 第 24 回会合	全体評価取りまとめ